

沖縄

最後の追い込み漁

宮古島狩俣集落・友利組

2025年10月下旬刊行

大浦佳代 著 | 南方新社刊、四六判、386 ページ、カラー口絵 16 ページ、
本文に写真多数、定価 2,860 円 (本体 2,600 円+消費税)

2,600円 (送料込み・数量限定)でご購入いただけます。お申し込みは裏面で

海の狩人たちの記録

明治中期に誕生した「沖縄式追い込み漁」。海の「けもの道」に張った網に、漁師が素潜りで魚を追い込む集団漁法です。戦前には数十人規模の組が、九州や伊豆諸島など日本各地のみならず海外にまで出漁するほど勢いがありました。

戦後も、沖縄中に数多くの組がありましたが、1970年代になると姿を消していきます。そして今、大規模な組は、宮古島の狩俣という集落の友利組のみに。

十数人の乗組員を率いる親方は、87歳の今も現役です。著者は、20年近く前から漁に同行して海に潜り、親方や長老の方々から聞き取りも行ってきました。サンゴ礁の地形、潮流、魚の生態など海を自然を知りつくした追い込み漁の漁師は、さながら海の狩人です。本書は、その生きざまを漁業史の中でたどるとともに、驚異の身体性、恵み豊かなサンゴ礁の生態系、海の安全と豊漁を祈る信仰など、さまざまな角度から追い込み漁に迫ります。

[目次]

- 第1章◆魚を狩る漁と漁法の成り立ち
- 第2章◆哲雄親方70年の漁師人生
- 第3章◆追い込み漁の魚たち
- 第4章◆追い込み漁の身体性
- 第5章◆女たちが守るシマと海の男たち
- 第6章◆追い込み漁の今とこれから



潮汐のリズムに同調し、海の生態系に溶け込むように生きてきた人たちの時代が今、過ぎ去ろうとしています。この本によって、狩俣の追い込み漁師の生き様をわずかでも後世に伝えることができれば。そして陸上の自然に比べると距離的にも意識の面でも遠い存在である海について、少しでも関心が寄せられるきっかけになれば。そう願ってこの本をまとめました。(あとがきより)



大浦佳代 (おおうらかよ)
群馬県前橋市出身。東京海洋大学修士課程修了。海と漁の体験研究所代表。フリーランスのライターときにカメラマンとして、農業漁業、海洋教育などをテーマに取材し執筆している。
著書に『漁師になるには』『農業者になるには』『港で働く人たち』(日本沿岸域学会出版文化賞受賞)『高校調べ：農業科高校』(以上ベリカン社)、『持続可能な漁村の交流術1・2』(東京水産振興会)ほか。
共著に『つくって楽しむわら芸1・2』(農山漁村文化協会)『森の学校、海の学校』(三見書房)ほか。
NPO 法人宮古島海の環境ネットワーク理事。

